

2025年2月

課題本 『82 年生まれ、キム・ジョン』

チョ・ナムジュ/著 斎藤真理子/訳 筑摩書房 2018年

◆◆◆2月の読書会から

先月の感想文を読んで感じたことを共有しました。課題本の受け取り方は人それぞれで、読書会ならではの広がりを見せました。「死をどういうふうに受け止めているか」「死＝終了ではない」「自分の書いた言葉にとらわれないようにしなければいけない」…吉川先生の言葉が印象に残ります。今この時点での納得を結論としないこと、考え続ける事、自分の考えを更新し続けていきたいものです。

今月の課題本は出版当時話題になった『82 年生まれ、キム・ジョン』です。

(文責:森下)

2025 年竹原読書会2月『82 年生まれ、キム・ジョン』 チョ・ナムジュ

(斎藤 真理子 訳 筑摩書房 2018年)

吉川五百枝

韓国の作家の作品を読むのに、韓国の歴史を知らないというのは困ったものです。

第二次世界大戦で日本が敗れるまでの朝鮮半島と日本との関わりや、朝鮮戦争を経た後の政治の流れなど、さまざまな事件があっても、南北に分かれた朝鮮の今を年表で知る程度の知識しかありません。

作品の主人公は 1982 年生まれ。しかも題名に、主人公の生まれ年『82 年生まれキム・ジョン』とその年が強調されています。作者のチョ・ナムジュ氏が 1978 年生まれなので、韓国の 80 年代以後の社会情勢が背景にあるのかなと想像しました。80 年代と言えば、80 年 5 月の「光州事件」に端を発する民主化運動、その後の 87 年 6 月のソウルを源にする「6 月民主化抗争」が、外国にも伝わる大きな変化だろうと思うので、それとどんな関係があるのかと興味津々でした。

作者 40 歳の時の作品です。主人公と作者が 4 才しか違わないので、2 人は、殆ど実体験を共にしていると考えられます。韓国の作品には殆ど出会ったことがないので、カタカナで表記される名前が男性なのか女性なのかよくわかりません。絵として想像するのが難しい。中心人物であるキム・ジョン氏は 1982 年生まれ、夫のジョン・デヒョン氏が 1979 年生まれ。娘はジョン・ジウォン氏。この家族構成が頭に染みるまでに、かなり時間が要りました。夫妻は、2 年間の恋愛をした後 2012 年に結婚しましたが、それから 3 年経った 2015 年、この時点が物語の始まりのシーンとなります。

キム・ジョン氏の物語が展開するのは、12 才の 1994 年から 32 才の 2016 年までで、その間の変化を追って行きます。

しばらくは、誰がナレーターなのかわかりませんでした。精神科の医師である「私」が、主人公のカウンセラーとして登場するのは、少し進んでからのことで、その後、最終章まで登場しません。「私」は口を挟むことなく、キム・ジョン氏の生い立ちの記を、ただ患者の言うままにカルテに記録するような書き方です。

キム・ジョン氏の記憶の原点は、5才違いの弟に対する祖母の大事な男孫としての特別扱いの光景でした。男児であれば、上の姉キム・ウニョン氏への接し方も違います。生まれたときから、男女の差別があると自然に受け入れていく背景説明です。

キム・ジョン氏の祖父は、色白で土を掴んだことはなく、家族扶養の能力も意思も全くない人。女遊びをせず妻を殴らない良い夫なので、祖母は夫を怨みません。

キム・ジョン氏の母オ・ミスク氏は、姉と自分と、2人の女兒を出産しました。姑にこの2人の出産を詫びています。ということは、女兒出産は忌まわしいことで、男児の弟は殊の外喜ばれ、自慢するに値しました。妊娠時の性の鑑別や妊娠中絶手術が合法化されて、女兒の墮胎がおおっぴらにあつかわれた80年代だったのです。母が受胎したわが妹と呼ばれるべき女兒の命は消されました。身も心も傷ついた母ですが、家族によって慰められる事はありませんでした。

母の実家では、祖母は女工となり、自分の人生を、兄や弟の学費と我が子のために喜んで使って居ます。

伝統的な農業国家だった韓国は急速に産業化へと傾斜します。それでも、キム・ジョンの国民学校の経験は隣席の男の子のいじめや暴力、学級委員は男子優先という男性中心思想は変わりません。しかし、絶対権力に抗議して変えさせた女友だちの批判精神と自信をみることもありました。

1995年、共学の中学では、男子は禁止事項が少なく女子は禁止事項が多い。高校で行動半径が広がりますが、世界は広く、気づかないうちに男性への幻滅と恐怖を心の奥にどんどんため込んでいきます。「女だから」に反発しますが、女だから勉強しなくても良いとは言わない社会からの支持や応援もありました。キム・ジョン氏19才の1999年、男女差別禁止及び救済法ができますが、「女」というレッテルが貼られることは避けられません。彼女は、自分で何かを考える機会が無く、自分の意見もなくいつも無口で、自分は内気なんだと思っていました。長い生い立ちの記では、女性蔑視の気風が根強く流れ続けているのは解りましたが、筆の行き先が見えず、少々疲れしました。

大学卒業後の社会情勢も細かく語られます。そういう問題は、韓国特有のことではないなと思うことも多く、日本でも“ある ある”と想像もできました。

作品の全体を読み終わって気がつきました。これは、「著者あとがき」「解説」「訳者あとがき」を、先に読んでおいた方が良く解ったかなということです。

人物名が、夫ジョン氏以外は、女性だけ固有名詞で書かれていることの不思議さの意味が「解説」でわかりましたが、社会情勢がくわしく解らないままでは、後半の作者の問題提起の質も量も想像出来ないのです。日本も、性差別や子育ての慣習、少子化、など似たような歴史の歩みがあります。日本で1300年近くかけて染みこんでいる「男尊女卑」思想ですが、韓国の実態を、顕在化して具体的に書いたのが前半の生いたちの記だろうと思いついたのは、後半になってからです。

作者は、キム・ジョン氏がどうしてそのように思うのか、幼い時の状況や大きくなる間に心の内に畳んだことを、作品全体の半分をつかって小説らしく書いています。その後、体験を整理し、統計を使い、ルポのような社会分析が始まります。

小説は、幽体離脱の話で始まり、先輩に憑依したキム・ジョン氏の様子を描きますので、何事が始まるのかと思わせますが、それ自体に意味があるのでは無く、登場する精神科の医師が、「自分がまるで考えも及ばなかった世界がある」と認めていることに意味を見ます。「考えも及ばなかった」という事は、精神科といえども、男性の「私」には、想像ができなかったと言うことでしょう。

この医師に、〈いくらいい人でも、育児の問題を抱えた女性スタッフはいろいろと難しい。後任には未婚の人を探さなくては……。〉と言わせて小説を閉じています。

作者のチョ・ナムジュ氏の皮肉な結語に思わず苦笑しましたが、この10日、広島県で「共育て」と名付け、男性の家庭生活での活躍を推進する方針を「理念条例」として制定する案が発表されました。6月の県議会に提案されるそうです。……………。

「男尊女卑」「女尊男卑」ではなく「男女(すべての人類)平等」の世の中を！

課題本『82 年生まれ、キム・ジョン』 三行感想

◆【 HK 】

確かに、吉川先生の言われた通り、小説という書き進め方ではない。自伝的な性格の作品として読み進み、最後のあとがきや解説を読んで初めて、この作品を金大統領に届けたという背景がわかった。小説だということは忘れていたなあ。～もう3行～

韓国は元々夫婦別姓、というよりも夫の戸籍が優先、でも妻はその家族として迎え入れられるわけではないこと。男尊女卑の風潮は日本でもあちらこちらに潜んでいるけれど、韓国のそれは随分厳しいものであることがわかった。

『82 年生まれ、キム・ジョン』を読んで

◆【 ZK 】

男尊女卑は世界中でみられている。そして日本の文化としては、自分の妻のことを人に言うとき、うちの愚妻は～と欠点を誇らしげに言う。

韓国は男の子を大学に入学させるために家族全員が協力している。学歴社会も厳しいらしい。韓国ドラマを観るとお金持ちへの憧れを感じられる。

力仕事は男、家事は女と一般的に男女それぞれの長所、役割はあります。出産、子育てとかで仕事を休む事で雇うことをためらうのかもしれない。

現代でも男女の格差があるのはぬぐえません。日本でも医学部の合格で女の子は落とされていました。

女が働きやすい社会を作ることは大切です。月並みな感想ですが、男尊女卑の社会が普通になっているので驚かなかったというのが感想です。

ブレイディみかこの本みたいに外国の社会を描いた小説のような本でした。

◆【 JM 】

いつもは読書会の直前に読むのだが、この本は1月中旬に読んだ。読みながら「あるある」「そうだよ、女は損だよ」などと怒りに身悶えした。キム・ジョンという名は韓国でいちばんありふれた名前だそうだ。ストーリーの中に統計数値や歴史的背景の説明があり、リアリティを増している。日本も同じだと強く思った。

男女共同参画社会基本法が1999年に制定されたが、そもそも「性別にかかわらずその個性と能力を十分に発揮することができる社会の実現」と謳わなければならない社会ってどうなのよと思う。それは当然のことで、そういう法律を作らなければいけない社会が間違っている。そして、25年経た今もそう変わっていないと思う。

ジョンは毎日の生活や押し付けられた役割に疲弊し病んでいく。一見理解がありそうな夫や母もわかってくれない。こういう時、ぶあ〜っともやもやを吐き出せて共感してくれる人が周りにいけばいいのになあ。でも、そういう人に恵まれている人は少ないだろう。

ストーリーの中で給食を出席番号順で食べることの不公平さを訴えた友人、女子の制服についての攻防で教師と闘った友人が描かれている。闘うことでしか前に進めないのだと思う。ジョンはその友人たちを見ているだけだった。

今回は早めに読んだので読書会までに時間があつた。闘うことでしか社会は変えられないが、自分は闘ってきたか、そもそも問題意識を明確にもっていたか、自問自答する毎日だった。結婚する時、何の問題意識もなく夫の戸籍に入り、夫の姓になった。家を建てた時、躊躇わずに夫の名義にした。なんと闘わずに生きてきた人生だったのだろう。当たり前として受け止め、それに流されていては前に進めない。「はて？」と歩みを止めて考えることの大切さを痛感した。

読んだ直後の感想もいいが、こうして思考を熟成、発酵させることも大切だと学んだ。さて、これからの私の人生、どう生きていこうか。

◆【 T 】

女性として、人生で会う様々な困難が書かれていて、「そうそう、そんなことが私の身の回りにもあつたよ。」「今でも感じることもあるよ。」とうなずきながら本を読み進めた。

問題意識が高まっている現代に、なぜ女性差別が残っているのかについて作者は、【世の中は大きく変化した。しかしその中のこまごまとした規則や約束や習慣は、大きく変わりはしない、だから結果として、世間は変わらなかった。……法律や制度が価値観を変えるのか、価値観が法律や制度を牽引するのか。】と述べているが、日本の場合も同じだなと痛感した。

さまざまな制約の中でも抗議したり、提案したりしたキム・ジョンの同級生たちは素晴らしい

と思う。給食を食べる順番・男女の服や靴の規則違い…小さなことだけれども、そうすることで学校の中の決まりが少しずつ変わってきたし、クラスメイトの意識も変わったのではないだろうか？

日本でも私たちの時代では、家庭では、女性(特に母親)が主として掃除洗濯をして食事の準備をし、家族の健康に気を配り、お年寄りや子どもの世話をしていた。働いている女性も家事労働を負担することが多かった。学校では、私の時代には、男女での扱いの違いは感じなかったが、出席番号は男子・女子の順で、色々な名簿や印刷物は、常に男子が先。参観日も、ほとんど母親が参加していたにもかかわらず、父兄参観日だった。本のように極端ではないが、やはり男子が大切という考えはあったように思う。あからさまな差別は少なくなってきたが、今でも女性が多くの物を負担することが多い。

戦後(1947年)、男女平等を定めた新憲法、民法では「家」制度廃止、男女共学を定めた教育基本法など施策が講じられ、女性の地位向上の取り組みが行われた。しかし、世の中の考え方や価値観はなかなか変わらなかった。自分の中にも、女はこうするもの、これは女の役目、こうふるまえば周りとの摩擦が起きないというような考えがあり、これが性差別を温存させている原因だろうと思う。

身の回りの様々な問題点に気づくこと、そして、気づいたことに声を上げていくことで価値観や既存の仕組みが少しずつ変わっていくのではないだろうか。

◆【KH】

男女差別、今風に言えばジェンダー。ウィキペディアによれば

ジェンダー(英: gender)は、生物学的な性(英: sex)とは異なる多義的な概念であり、性別に関する社会的規範と性差を指す。性差とは、個人を性別カテゴリーによって分類し、統計的に集団として見た結果、集団間に認知された差異をいう。ジェンダーの定義と用法は年代によって変化する。ジェンダーという概念は、性別に関して抑圧的な社会的事実を明らかにするとともに、ジェンダーを巡る社会的相互作用をその概念自身を用いて分析するものである。

キム・ジョンさんは1982年生まれ。ということは、私とおおよそ20年の年の差があるわけだ。私が男女差別の現実をはっきりと認識する、というか目の当たりにしたのは、就職活動の時だった。小中高と共学で、高校生の時の部活も混声合唱部ということもあり(体育会系だと、当然別々にクラブが存在する)、女子だけで何か活動をするというようなことは、ほぼなく、男女差ということには鈍感というかあまり問題意識を持たぬまま幸せな(叱られそうだが全くのほほんとした)学生時代を経て、女子大に進んだ。入学式で大学への坂道を登りながら、四方どちらを見回しても女オンナ。こりゃまさに女坂だわ!!と驚き納得もしたのだったが、住めば都で、教授以外全く男のいない空間というのは、すこぶる快適。何の不自由も不満も持たなかったなあ。。。今から思えば。だから勇んで、就職の面接に出かけて、開口一番、大阪なんかで就職しても無駄でしょ? 故郷で仕事を探したほうがいいよ、とか、今は一生懸命仕事

をしたいといっているけれど、あなた方女子学生はみんな判で押したように3、4年も経たず、寿退社(こんな言葉があったのだ、そう言えば)していくんだからと、散々な言われようで、しょげかえっていたことが、懐かしく思い返される。(温室でぬくぬくと過ごしていたということである。)

就職してみれば、当然世の中の半分は男性であり、ことあるごとにそれを意識せざるを得なくなった。会社から求められる仕事の内容も、待遇も、ベンチャー企業ゆえ比較的平等だったとは思いますが、それは私の意識が低かった故、見過ごしていたことの方が多々だったかもしれない。驚いたこともあった。例えばエレベーターに乗れば、行き先のボタンを押してくれたり、先におろしてくれたり。重い荷物は当然持ってくれたり。これがフェミニズムというものかと目を丸くしたりもした。女だけの社会にいと、差別も感じないけれど、女だから親切にされることもないから。

でも、1982年生まれの主人公の生きてきた韓国には、日本でいえば戦前?といえれば極端かもしれないが、随分な男尊女卑、読んでいると胸が悪くなるくらいの、現実があった。今はどうなのだろう。この小説では触れられていないが、法の整備が進み男女平等社会が実現したかという、逆差別だという男性側からの問題提起もあるという。(男性にしかない徴兵制も原因の一つとか)法律が整備され、社会は少しずつ変わるのだろうけれど、風習とか人々の持つ社会通念というのは、簡単には変わらないのだとつくづく思う。自分の中にもギョッとするような古い社会通念、意識に上らない偏見があるのだから。

日本で、男女雇用機会均等法が成立したのが、1985年(昭和60年)。私が就職したのは昭和59年だから、就職した頃には盛んにその話題がテレビ新聞を賑わわせていた記憶はある。そして、当時の私が何を考えていたかという、会社に入ってみただけれど、一般的に、会社というところは、やはり男中心に回っていて、何も同じ土俵で頑張ることだけが、男女平等ではないのじゃないか?結局家事も子育ても頑張り、さらに仕事も頑張るのが男女雇用機会均等ってこと?おかしいじゃん!!同じ土俵に乗るものかと、女性の社会的地位向上のために戦っておられる方々に頭を叩かれそうなことをひそかに考えていた。

家事はちょっと脇において、生物学的に子どもを十月十日体内に宿し、産むところまでは、やはり女性にしかできない。だから経済的なことでいえば、子どもを産み育てる間の女性に、さらにその後の子育てをする親(男女)に経済的支援を(という考えはどちらかという私賛成だった)読書会で平塚らいちょうさんと与謝野晶子さんの論争(初めて知りました、お恥ずかしながら)原始女性は太陽だった、という文言は聞いたことありましたが。当時生きていたら、平塚さんに大賛成だったかもしれない。

我々は子育て卒業組で、なんとか手当とは無縁の子育てをした。今は子ども手当や、医療費無償、授業料無償と随分手厚くなっているし、放課後の子どもたちの居場所も確保されていると思う。にも関わらず、金銭の援助やその他の支援を重ねても、一向に上がらない出生率。お金あげるから、子ども産んでという思惑が透けて見えて、問題はそこじゃないよ、と思うこの頃。

子どもって、手がかかるしうるさいし、汚すし、泣くし、私の時間はどこにある?男も女も“私”が第一、最優先事項であるという生き方が、種を存続させるという利己的遺伝子を凌駕しつ

つあるかも(人間という生き物に限っては)だとすると、日本の人口は益々減り続けるしかないのだろうか。

ジェンダーと言いながら、話は少子化問題に行き着いてしまいました。

◆【 MM 】

読みながら「あるある」「そうそう」「ほんとにねえ！」と納得しすぎて今月の本が小説なのに自分の話として受け取ってしまうほど迫ってきた。

この本を通して感じたことは、ジョンの母はこれまで受け取ってきた嫌な慣習を娘であるジョンたちには受け継がないようにさせたかったのではないか、ということだ。ウニョン、ジョンと娘が続きそのあと弟が生まれた。ジョンと弟の間にひとり女兒を墮胎している。子どもをなかなか授からず悩む人もいるかもしれないが、男児をなかなか授からず、授かっても女兒ということで生まれてくることさえできない命があった。

新しい家に引っ越すことになったときは、幼い弟と年配である祖母にそれぞれ部屋が与えられるのがその当時の普通であったところジョンの母は機転をきかせて祖母とジョン姉妹に部屋を与えた。そしてその部屋に世界地図を貼り世界を広く見ることを教えてくれた。

母はこれまでの経験から娘の進学時にもこうしたら…という希望はあったが、ジョンの姉ウニョンの大学進学時、ウニョンの希望と母の思い描いていた道が異なる場面が印象的だった。ウニョンは最初マスコミ関連の学科への進学を希望しており、母は教育学部へ行ったらいいのにと思っていた(就職も決まりやすいし学費も安い)。母が「教師は女にとっていい職業だよ。早く上がれるし休みも取りやすい。子どもを持ちながらでも続けられる職業だよ」と言うとウニョンは「確かに子育てしながら働くには良い職場だよ。でもそれって、誰にとっても良い職場ってことでしょ、どうして女だけに良いって言うの？」と返した。

これまで母は子供たちに男女の差で何かを教えたりしなかった、教えてきたのは生活のことと学力をつけること。この価値観がきちんと子どもたちに伝わっていた。母は自分の価値観からものを言っていたことを謝った。娘は先生と話し合い、実際に学校を見に行き資料を取り寄せて納得して自分で考えて選んだ。結局は母の希望通りになったのだが母は自分が言ったから進路を変えたのか、と悩む。それはかつて自分の希望する進路があったものの男兄弟を支えるためにあきらめざるをえなかった過去があるからだ。あの時味わった同じ気持ちを娘に味わわせてしまったのではないかと思う母にジョンは「お姉ちゃんは自分で考えて自分で選んだんだよ。お姉ちゃんはやりたくないことはしない人」と母を慰める。

自分がされた嫌なことは人に引き継がない、このことにとても共感する。時代が変わり価値観も新しくなるが、長く続いたことは変わらずそこにある、というのも事実だ。しかし、自分の周りから変えていくことは可能だと思う。自分の周りで培った価値観が世間のそれと出会うとき、それってどうなの？と思えたらいい。世間で普通であることが必ずしも正しいとは限らない。逆に自分の価値観が必ずしも正しいとも言い切れない。そのことを心に留めて、違う価値観に出会ったときにこれはどうなのと考える目を持ちたい。